

The world's educational system seen through my eyes

第2回

“国際派大和撫子”が伝える世界の教育現場

西浦みどりの「大学の窓から」

フランス・パリ政治学院②

前

前回同様、パリ政治学院のリシャール・デコワン学院長インタビュの続きを紹介する。一八七二年創立時は特に、哲学者ならびに思想家を尊重し、育んで世に送り出した。

一九四五年までの七十三年間は、独立した民間の高等教育機関として優秀な人材の育成につとめてきたことは、前回でも触れている。運営費用は、生徒たちから徴収する学費以外、すべて企業・団体・個人からの寄付で賄われてきた。

その後、国家を担う人材のほとんどが卒業生で占められてきた結果、四五年にド・ゴール大佐（五九年大統領就任）によって、国立

教育機関に指定された。しかし、あくまで同学院の独立性をそこなわせず、いわば半官半民のような（あくまで国立学院ではあるが）組織が生まれたのである。

デコワン学院長が言う。

「十九世紀に創立してから国立化までの半世紀以上にわたっては、金融機関、主に銀行や保険会社から潤沢な寄付が随時あり、それは華やかで恵まれた時代が続きました。人格形成や精神面でも、真のエリートを育成するためには、最高の環境と条件が整っていたのではないのでしょうか。」

現在では時代も変わり、同学院運営費全体の五〇％は国家予算で賄われており、一五〜二〇％は学費、一〇％は民間からの寄付だと言う。以前は、これが五％ほどだったが、デコワン氏と学院理事会や顧問委員会メンバーの努力により、近年教育に投資をするという概念が根付き、重要性和使命感が、

一般企業
社会の間
で再認識
された。

興味深
かったの
は、デコ
ワン氏の
次の言葉
だ。

「我々の学院は、たとえ国立であっても、国の配下ではないし支配も受けません。あくまで、民間企業というか、プライベートカンパニーのように運営しています。たまには、官僚や政治家とも話しますよ（笑）」。

氏はおだやかに続ける。

「ですから、教授陣も、個人的な契約を結んでいます。学部教授と講師で七十名くらいでしょうか、八十名の外国から招いている客員教授、百七十五名の研究員、全体で教師は博士、民間企業や団体から招聘している講師陣もあわせて千四百名はいます」。今回は、更に前述の発言も含めて同学院の独自性のメリットを紹介する。



国立大学法人山口大学客員教授（国際関係・コミュニケーション）、国際コンサルタント・評論家（オピニオンリーダー）。東京生まれ、英国育ち。英国王立音楽院で学び、卒業後ソプラノ歌手として活躍したが帰国後引退。1986年より総理府のインタビュアーとして政府広報に携わる。その後、インベスターリレーションズと都市開発のコンサルティング会社設立。
<http://www.nishiuramidori.com>